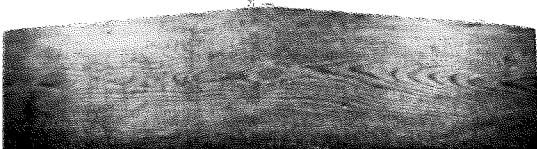


あるむぜお93

府中市郷土の森博物館だより

a / museo NO. 93

2010年 9月20日



上：高札場

出典『写真集 むかしの府中』（1980年 府中市）

左：高札（当館蔵）

目次

- 1-2 府中宿に〇△がやってきた！
②祭礼に集まる者たち
- 3 展示会案内
企画展 むかしの看板
- 4-5 ノート 博物館入りした古式の神輿
- 6 博物館で生物多様性を知る！
②昆虫展に見る多様性
- 7 最近の発掘調査
緑町から塔のミニチュアが出土
- 8 収蔵資料あれこれ 「避暑漫筆」「往昔夜話」

上の写真は、現在も旧甲州街道に残る高札場の1950年代の様子です。この後、車の衝突事故があったため、現在は斜めに付け替えられています。

高札場とは、江戸幕府のお触れを庶民に周知する高札（写真左）を掲げる場所です。基本的には宿町村の中心に設置され、写真の高札場は、府中宿を構成する三町（本町・番場・新宿）と新宿の東に位置する八幡宿村のものでした。

この高札場は、当時の原形を現在にとどめる貴重なもので、東京都の旧跡に指定されています。

府中宿に○△が やってきた!

②祭礼に集まる者たち

地域の中心である江戸時代の宿場には、多くの人や物資、情報が集まりました。府中宿にも物見遊山や商用、六所宮（現・大國魂神社）への参詣などさまざまな目的をもった人が訪れました。種々の人々が集まれば当然のことながら、中にはあまり歓迎できない面々も含まれていました。どのような人々が訪れ、府中宿ではどのように対処していたのか、4回シリーズで紹介したいと思います。

武蔵総社であった六所宮（現・大國魂神社）には多くの参拝者が訪れました。特に5月に行われるくらやみ祭をはじめとする祭礼時は、府中宿が見物人であふれかえりました。

文政5年（1822）には、『遊歴雑記』の著者・十方庵敬順がくらやみ祭を見物するために、府中宿を訪れています。敬順はその様子を、どの家も提灯を吊るして昼のように明るく、甲州街道の両側は市のように夜店で埋まっていたと記しています。

くらやみ祭に限らず、祭礼の時には見物人に加えて、様々な商いをする者も集まりました。多く

の人々で混雑するせいか、その際にしばしば喧嘩口論などの事件が起こっています。時には博徒が紛れ込んで博奕を興行していることもあったようです。今回は、そのような祭礼中の事件をいくつか紹介したいと思います。

宝暦13年（1763）6月20日の六所宮の祭礼（現在の季祭にあたる）では、江戸の市ヶ谷長延寺門前の藤右衛門店に住む藤四郎という人物が見世物を興行していましたが、見物人と口論となり、訴訟に及んでいます。この一件の詳細は不明ですが、六所宮の神主・猿渡豊後が寺社奉行所へ届け出る際に、内分に済ますことができなかつたと記しているため、藤四郎にとっては余程腹にすえかねる一件だったのでしょう。

安政4年（1857）のくらやみ祭では、六所宮の警護を勤めていた者が、何者かに肩先から背中にかけて切られるという事件が起こりました。警護の責任者はこの件に関し、小辰という者が祭で独楽を用いた博奕を行いたいと申し出たのを断ったことが原因ではないかという推測をしています。

この小辰は博徒であったと考えられ、前年にも同様の申し出をし、断られたにもかかわらず20ヶ所で独楽博奕を行っていました。20ヶ所ということは、小辰の仲間が多数入り込んでいたのだでしょう。

この他くらやみ祭では、文政7年（1824）にも、六所宮の神領である八幡宿村（現・府中市八幡町）の村人が本町の者に暴力を振るう事件が起こっています。

これらは、内々に和解することができず、訴訟となった事例ですので、実際にはもっと多くの揉め事があったであろうことは、想像に難くありません。

様々な人が集まる祭礼では、喧嘩などの事件が起こりやすく、これらの揉め事に無宿（宗門人別帳から外れた者）や博徒などの流浪者がかかわっていることは少なくありませんでした。

このような者たちへの取締りは、文化2年（1805）に設置された関東取締出役のもと、文政改革（1827）以後は組合村単位でおこなわれました。組合村の中心（寄場）であった府中宿は、捕縛された無宿や博徒の護送等にも多くの役割を担うこととなりますが、それについてはあらためてお話ししたいと思います。

（花木知子）



『江戸名所図会』より「六所宮祭礼之図」（本館蔵）

展示会案内



郷土の森博物館内の復元建物、旧島田家住宅にかかる「島田薬舗」の看板。[明治の三筆]の一人と言われた巖谷一六の筆によるもの。明治37年(1904)以前に作られたものと思われる。なお現在掲げてある看板は複製品。

企画展 むかしの看板

店の名前を示したり、商品の販売促進をはかるため、世間には色々な看板があります。そしてむかしの看板には、何を宣伝しているのかがわからなくても、妙に懐かしさを感じさせるものもあります。

看板の文字は有名人の筆によって記されることもあり、店の歴史を語る記念物と考えることもできます。また、昭和以降につくられたホーロー(焼き物)の看板には、その当時の俳優の写真や流行り言葉などが盛り込まれることがあり、看板がつくられた当時の時代背景を想起することができます。

むかしの看板にも巨大なものがあり、2メートル以上あるものも作られていました。酒屋、薬屋などさまざまな商店や施設の店頭、店内を賑わせていた看板の大半は、役目を終えた後、処分されてしまいました。しかし、そのうちのいくつかは、貴重な資料として博物館等に寄贈されています。

展示会では、江戸時代から昭和にかけて作られ府中市域で使用された、さまざまな看板を展示します。趣ある図柄をお楽しみいただきながら、むかしの府中の風情を味わっていただきたいと思います。(佐藤智敬)

会期：9月18日(土)
～11月28日(日)

会場：本館2階企画展示室



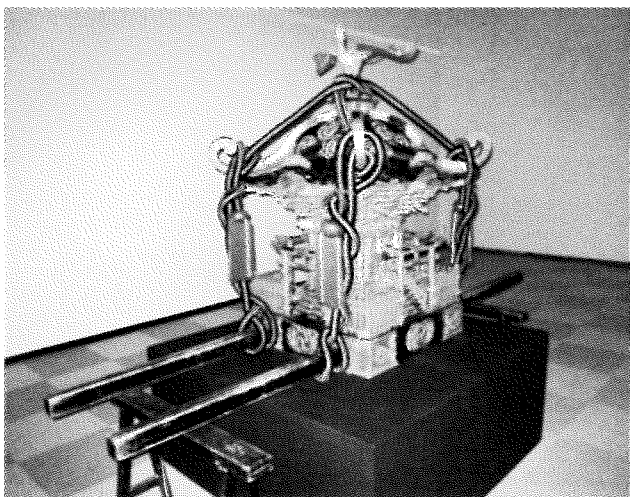
猫が描かれた猫いらず(鼠駆除剤)販売、その他粉ミルクや薬の看板類

▼ 神輿の博物館入り

2009年秋。府中では5月の「くらやみ祭」が有名ですが、9月はあちこちで鎮守の秋祭が繰り広げられる季節です。下河原（現・南町西部）の八幡神社においてもこの週末は神輿と太鼓と山車が華やかに練り歩く段取りになっていました。その合間に旧神輿の博物館への引渡し式がありました。魂が抜かれた神輿は、地元の人たちによってトラックに乗せられ博物館に到着すると、直ちに用意されていた常設展示室の展示スペースに納められました。

博物館が位置する芝間（現・南町東部）の西隣が下河原です。5年前の博物館の特別展「武蔵府中くらやみ祭」に、現役の山車を出展してもらった縁があります。その氏子会長から、使われなくなった古い神輿があるから見て欲しい、という話をその前年の秋頃にいただきました。

祭の日に出かけてみると、かつて番場（現・宮西町）から譲られたという神輿は、役割を終えて、静かにテントに収まっていた。しかし、市内の他の神輿と比べて、古式な風貌がとても印象的だったことを覚えています。



博物館資料になった旧下河原の神輿

▼ 神輿の履歴書しらべ

こうして、その後は、博物館収蔵資料とすることの可否、修理の必要性、活用の方法、神輿の来歴などが検討されました。

神輿の履歴については、特に下河原のTさん、Kさんら、元の持ち主だった番場ではSさんらが中心となって調べてくれました。

番場は、旧「四力町」の一つで、「くらやみ祭」では御本社という由緒ある神輿を受け持ちます。今回の神輿は、子供神輿として持っていたもので、府中では一番大きな子供神輿と知られていたようです。戦前の1935年頃、番場の子供たちと記念撮影された写真も見つかりました。番場から下河原に神輿が譲られた時期は1955年7月頃と特定され、その後、1980年前後まで担がれていたようです。下河原のSさんは1976年の秋祭で神輿が町内を練り歩く写真を提供してくれました。

では、この神輿はいつ頃製作されたのでしょうか。また、古風な印象はどこから来るのでしょうか。古美術に詳しい東馬場（現・宮町の一部）のOさんによると、屋根のアーチや巻簾、屋根上の鳳凰の形式から幕末から明治という年代を示されました。また、四方の棟の間に破風が取り付く「八棟」の屋根は、相模国一之宮の寒川神社の神輿と同形式だと即座に答えられたのには驚きました。そんな折、近隣の祭によく出かける番場のSさんは、調布市下石原神社の神輿も同じ形だと、写真を見せてくれました。

もし、そんなに古いものなら、番場に入る以前にもう一つ前歴があった可能性も出てきます。子供神輿としては不自然なくらい大きな神輿であることもその考えを後押しします。

もっとも、博物館で所蔵する旧三之宮神輿、大國魂神社宝物殿に展示されている旧四之宮神輿などのように、江戸時代に遡ることが確実で、

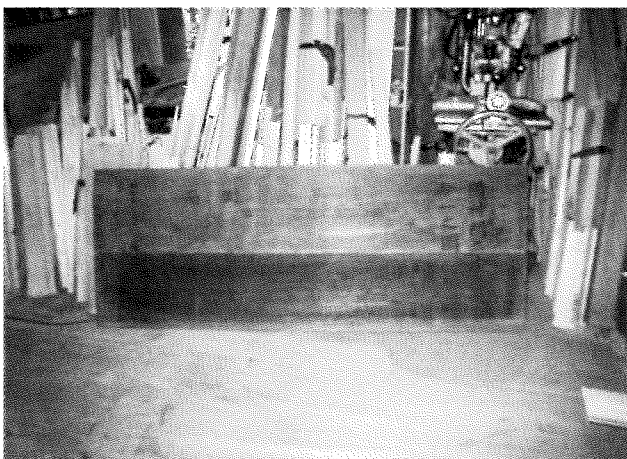
本体に階段がなく、全体に素朴な形式の神輿とはやはり異なる印象を持ちます。ただ、江戸神輿とは異なるとは言え、徳川家光寄贈とされる浅草神社の「三社型神輿」復元品（江戸東京博物館常設展示室で展示中）の屋根と蕨手の曲線を見ると、やはり類似点を感じられます。

地元の方々のご教示をいただきながらの調査は、まだ始まったばかりです。時代を越えて多くの人たちに担がれ親しまれ続けてきた神輿は、博物館入りすると同時に、謎を残したままかも知れませんが、地域の歴史と民俗の証人としての新たな役割が始まると言えるでしょう。

▼ ある宮大工の思い出

この神輿の博物館展示が始まって間もなく、分倍（現・分梅町）の宮大工Sさんら2人が偶然来てくれました（後で知ったのですが常連さんだったのです）。神輿に目が止まり、これを家で修理していたことを思い出しました。下河原に譲られた夏、自宅の作業場に置かれた神輿を、中学生だった自分は金粉を塗るのを手伝ったというのです。恐らくその年の秋祭りに間に合わせるための大急ぎの仕事だったのでしょう。

Sさん宅を訪ねた時、もう一つ大事な発見がありました。曾祖父が大國魂神社の随神門を手掛けた時の詳細な設計図が、棚板に再利用されて残されていたのです。これは後日Sさんにより復元されましたが、厚手の板に丁寧に墨書きされたもので、「随神門二十分之一之図」の表題と「明治三十一年一月」と「棟梁」の二人の名前が明記されています。



宮大工の作業場で復元された大國魂神社随神門の設計図（板図）

折しもこの随神門は、明年の大國魂神社1900年祭の記念事業として新築が計画され、明治31年（1898）に建てられた旧門は、この8月に国府八幡神社への移設が完了したところです。

この資料は、設計図というよりも、完成予想図のように現場に掲げられたものではないか、とも考えられます。S家には代々の宮大工資料も残されており、今後はそのあたりのことも調べていく必要が出てきました。神輿で繋がった縁は、これからまた広がって行きそうです。



旧御本社神輿、府中囃子とともに

▼ 地域のまつり・博物館のまつり

2010年初春。この季節には博物館で「梅まつり」が開催されます。これに合わせて常設展示室内の「くらやみ祭」コーナーに展示されている旧御本社神輿が、番場の人たちによって園内に担ぎ出される行事が恒例となっています。博物館の地元からは芝間の大太鼓、今回から東隣のは政の大太鼓も来てくれることになっていました。

前年秋に新たに博物館入りした下河原八幡神社の神輿は、この日は展示室から降ろされ、本館エントランス前で神輿・太鼓を出迎えることになりました。生憎の大雨で、大太鼓は来ることができませんでしたが、御本社神輿との55年ぶりの再会、改めてのお披露目式が、府中囃子の演奏が加わって行われました。

地域の人たちによって支えられている博物館で、「博物館入り」した資料が、新たな生命を吹き返していくことが感じられた次第です。

博物館で生物多様性を知る！



②昆虫展に見る多様性

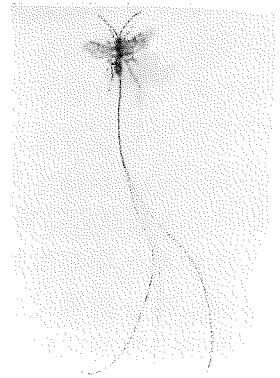


7月17日から9月5日まで、夏休みの企画として当館では、特別展「あしもとネイチャーワールド・身近な昆虫の世界」を開催しました。府中市と、その周辺地域で観察することのできる様々な昆虫を、収蔵標本や写真パネルで紹介した展示です。加えて、昨年度に寄贈された日本国内の蝶をほぼ揃えた標本と、特に色が美しい・形が珍しい種類をセレクトした標本も合わせて公開しました。展示の主旨は、普段は見過ごしがちな身近な自然を、昆虫を通して再認識することにありましたが、もうひとつ伝えたい目的が含まれていました。それは昆虫という種族の多様性です。

地球上全動物種の8割以上（100万種以上）が昆虫だと言われています。進化の過程で多様な変化を遂げたことが、繁栄に結びついたと考えられます。最大の特徴は翅の発達であり、用途に応じた行動範囲が飛躍的に拡大しました。さらには翅の折りたたみ構造が発達したことで、狭い場所での生活も可能になっています。また、ほとんどの昆虫は、完全変態によって生活史を卵・幼虫・蛹・成虫の4段階に分けています。幼虫期と成虫期で成長と繁殖の場所を異にすることで、食物と生息・繁殖場所の選択肢が多様になっています。こうした特徴から、昆虫は広域な環境条件のもとで相当な種類と数が生活し

ていることとなります。

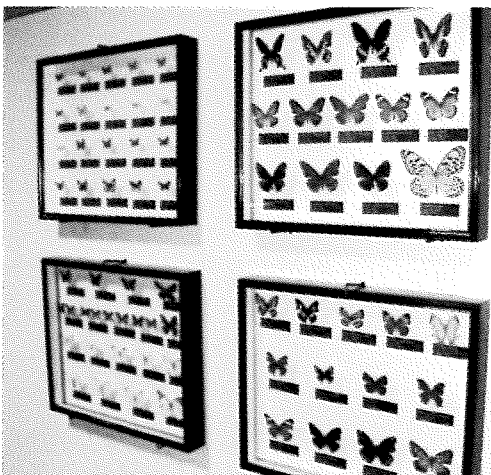
今回展示した府中の昆虫は、1970年から続いた11年間の調査における1,000を越える確認種から選出したものです。すべてを紹介したわけではありませんが、身近に観察できる昆虫とは言え、知られていないものも多かったと思います。約230種が分布すると言われる日本の蝶を見ても、アゲハチョウからシジミチョウまで体の大きさは異なり、色や模様も種によって色々です。ギフチョウに代表されるように、同種間でも地域差で微妙に模様の違う多様さにも驚かされました。そしてタマムシやセンチコガネのように、宝石さながらの体色を持つ昆虫、産卵管が馬の尻尾のように長いウマノオバチや、クジャクの飾り羽に似た模様のクジャクチョウなど、昆虫標本の一点一点は、色や形のバリエーションを具体的に示してくれました。このような形態を持つ理由を考える時、その先には多様な生活戦略が展開しているのです。



ウマノオバチ

当館園内のあちらこちらでも昆虫が観察できます。府中の地形を模した段丘や、雑木林・池・水田などが配置されていることから、数種類の昆虫が各環境に応じて生息しています。今回の特別展では、実際に園内の昆虫をお客さん自身が探し、その情報をシートに記載して提供してもらう試みを導入しました。昆虫を見つける楽しみから種類を見分ける楽しみへ・・・そしてどの場所で観察したかの認識。身近な昆虫を知ることはもちろん、それぞれの環境に数種のチョウがいた、トンボがいたといった観察体験が、昆虫の種類の多様性、生息場所の多様性を一考するきっかけになったと思うのです。

(中村武史)



展示の目玉となった「日本の蝶コレクション」

最近の発掘調査

緑町から

塔のミニチュアが出土

緑町一丁目 府中市遺跡調査会 中條 寛



古代の人々にとって、地震などの天災や疫病といった予測のできないことに対する不安は、現代以上に大きかったようです。これらの不安を少しでも無くすために、いろいろな信仰が受け入れられていたと考えられます。国府周辺では、宮町2丁目付近に多磨寺、国分寺市には武蔵国分寺跡といった寺院があり、寿町2丁目には国府を護るための社と考えられる遺構が見つかっています。

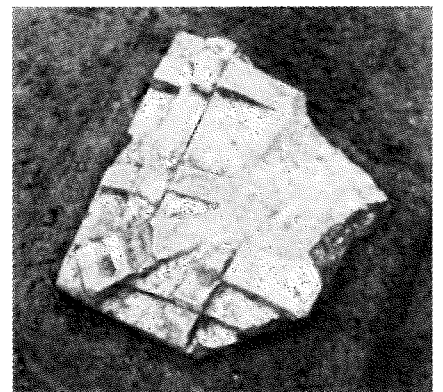
今回、国府の中心部（国衙）から北東約600mにあたる緑町1丁目から瓦塔と呼ばれる塔のミニチュアの破片が1点出土しました。

瓦塔とは、奈良時代から平安時代にかけて、寺院に建てられた木造建築の五重塔などを模した焼物のことです。屋根部分や基壇などのいくつかの部品ごとに作られ、それを重ね組み上げたもので、大きいものでは2m前後の高さになります。

出土した瓦塔の破片は屋根の部分で、瓦を再現し、軒先の裏には垂木を凹凸で表現しています。また、隅棟部分には小さな穴が開いていることから、風鐸を表現した金具が付けられた可能性があります。細部にわたる丁寧な仕事ぶりに、製作者のこだわりが感じられます。

さて、瓦塔は、小さな寺や堂に安置され、木造の塔の代わりに信仰の対象にされたものと考えられています。わずか1点の破片が出土しただけですが、出土地点の近くにそうした信仰の場が存在した可能性が浮かびます。この推測を補強してくれるように、瓦塔が出土した竪穴建物跡からは、「寺」の文字が墨書きされた8世紀後半～9世紀前半頃の土器も出土しています。

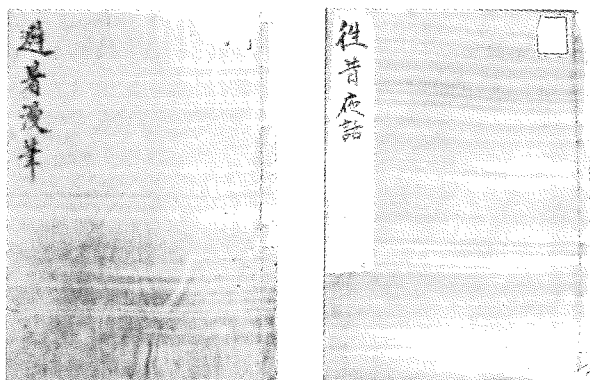
府中市内ではこれまでに2か所で瓦塔の破片が出土していて、今回で3例目となりました。どうやら国府のまちには、瓦塔を祀ったささやかな仏教信仰の場が点在していたようです。国府に住む人々の信仰心を垣間見るようです。



瓦塔の出土状況（裏面）



「寺」の墨書きがある土器



「避暑漫筆」「往昔夜話」表紙

この2つの資料は、江戸時代の中期から後期にかけての世情の変遷や出来事について記されたもので、本宿村小野宮（現・府中市住吉町）の内藤治右衛門家に残されていました。

江戸時代の本宿村は、府中市の西側に位置し、南北に広がる大きな村です。このうち小野宮は、小野神社を中心とする集落で、多摩川に近い南西部にあります。

江戸時代に村役人を勤めた内藤治右衛門家は、後北条氏の家来で文禄3年（1594）に小野宮に来て農民となったという由緒を持つ、内藤治左衛門家の分家です。

初代重休は、内藤治左衛門家の3代重義の9男で、宝永5年（1708）に治左衛門家から分家しました。2代重綏は、元禄15年（1702）に治左衛門家の4代重家の3男として生まれ、重休の嗣子となりました。この重綏の代に持地が20石以上増えたようです。3代常明は、もとは凶師村（現・町田市）の人で、重綏の長女の婿となり、宝暦12年（1762）に家督を継ぎました。学問に長けた人物で、医師を生業とし、子どもたちに手跡や素読を教えていたようです。

「避暑漫筆」は、常明の息子である4代重喬が天保8年（1837）に76歳で著したもので、享保期（1716～36）以来の世の中の変遷と学問に関する自論が記されています。重喬が生まれたのは宝暦12年（1762）ですから、自身の体験に祖父重綏・父常明から聞いた話を加えたものと考えられます。衣食住や農具の変化、および佚

客の話などが58ページにわたって記されています。重喬は俳句や狂歌を嗜み、大田蜀山人とも交流がありました。

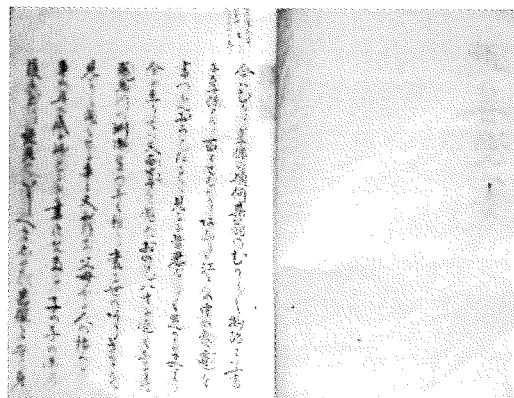
「往昔夜話」は、重喬の孫にあたる6代重鎮が、重喬の死後「避暑漫筆」を文箱から見付けたことをきっかけに、天保14年に著したものです。

重鎮は「避暑漫筆」について、子孫が家道を修め、身を立て、道を学ぶときの手引きになると記しています。そして、自らも祖父重喬に聞いた昔話を思い出すままに書き記し、「往昔夜話」と名付けました。

内容は、享保ころからの小野宮とその近隣の話を中心としていますが、古い話題では2代重綏の体験として、宝永4年（1707）の富士山の噴火の際に、小野宮まで砂が降り3日3晩黄昏時のようだったことが記されています。

また、甲州街道（現在の旧甲州街道）が寛永12年（1635）の検地のときは、府中宿の本町から府中用水に沿って、本宿村の府中屋線下（ハケ下）を通り、日野万願寺へ向っており、その少し後に、今の往還になったという話も記されています。その他、人形芝居の流行や大田蜀山人についての記述もあります。

この2つの資料は、江戸時代中期以降の府中市域の歴史を知るうえで非常に貴重な資料です。両資料とも『府中市教育史 資料編一』（1998年 府中市教育委員会）に所収されていますので、興味のある方はご覧ください。（花木知子）



「避暑漫筆」本文